

「都市型農業における新たなモデル」構築に向けた研究会（第1回）議事要旨

1. 日時：令和7年9月18日（木）10：30～11：45
2. 場所：東京農工大学本部 3F 第二会議室 ※ハイブリッド会議
3. 議題：1. 座長の選出について
2. 「都市型農業における新たなモデル」構築に向けた意見交換
 - (1) 東京農業の現状と対応の方向性について
 - (2) 都市型農業のあるべき姿とモデル案について
3. 次回、研究会開催日程の確認
4. 出席者
(委員) 林英徳様（林相談役代理）、原委員、紺野委員、有江委員、新村委員、濱田委員
(オブザーバー)
東京都産業労働局：田中局長、榎園農林水産部長、齋藤企画調整担当部長、渋谷農業振興課長、渡辺農林水産施策推進担当課長、三角農林水産部調整課長、植野総務部企画調整課長他
Dejima intelligence 株式会社：鈴木監査役他
(東京農工大学) 千葉学長、宅間学長特任補佐、阿部研究推進部長
研究産学事業課：谷越課長、榎本副課長、野口事業第一係長、小林事業第一係員

5. 議事要旨

審議に先立ち、東京農工大学千葉学長及び東京都産業労働局田中局長より挨拶があった。続いて、事務局より、資料1に基づいて委員の紹介が行われた。

議題1. 座長の選出について

委員の互選により有江委員が座長に選出された。

議題2. 「都市型農業における新たなモデル」構築に向けた意見交換

- (1) 東京農業の現状と対応の方向性について

東京都産業労働局農林水産部渋谷農業振興課長から、東京農業の現状と対応の方向性について、説明が行われた。

- (2) 都市型農業のあるべき姿とモデル案について

濱田委員から、都市型農業のあるべき姿とモデル案について説明が行われた。

各委員からの主な発言は以下のとおり。

- 東京で農業を営む方の課題としては、後継者確保、営業的な観点、加えて暑さという状況がある。
- 国際情勢の悪化や緊迫化も想定されており、国内での食料生産に必要となる生産資材、エネルギーの調達、食料輸入のハードルが上がることが予想され、農産物食料の国内生産の安定化と増加は国民生活動にとって必須の課題となってくる。人口が多く、集中している首都圏またはその近郊での食料生産は今まで以上に重要であり、生産と消費が近接していることから鮮度の高い農産物の提供、輸送コストの軽減、フードマイレージの短縮、多くの消費者への食料の安定供給、防災緑地や食育農育等の効果が大いに期待されるのが、都市型農業ではないとないかと考える。
- 主に地方の基幹的農業従事者の一層の高齢化と大幅な減少から想定される国内における食料生産の減退によって、都市住民への農産物食料の安定供給には懸念が出てくることから、そういった観点でも、都市農業への期待、都市農業の必要性と再評価というものがなされてしかるべきではないかと思う。都市住民や将来の消費者とも言える子どもたちに、食料農業の重要性を伝える「食育農育」も大切だと考える。
- 一方で、課題認識が捉えられている割には、農業に新規参入をしようとする農業者を守るために作られている制度の規制によるハードルが高く、新規参入が難しいという状況もある。
- 東京による先進的な取組が成功し、日本全体に波及していくこと、農業人口減少の問題を解決していく姿も共有していく姿勢が大事だと思う。
- 規制の緩和や、経営の自由度を増すための環境整備に関しては、宅地並み課税により、農産物販売収入だけでは収益が確保されにくい、市街化区域内において固定資産税や相続税の負担が多い点、宅地や雑種地を農地利用しても減税の対象にならないなど、税制上の課題もある。一方、行政サイドからすれば、それなりの根拠もあるわけなので、人口減と経済力と食料供給力のバランスの中で、制度的なチェックもされるのが良いと思う。
- 米国の IT 事業者の GHG 削減ポートフォリオは、バイオマス系の BECCS（ベックス）が半分を超えていたという。また、米の技術開発については、国内でも、ゲノム編集ではなく、病害抵抗性三大病害のうち、縞葉枯病以外の病気に強い提供力を持つ早生の品種開発や、黄色ブドウ球菌に対応可能な抗菌タンパク質を稲から作るといった研究開発が行われている。
- 新たな技術開発や挑戦によって、アニマルウェルフェアだけではなく、生産性も向上できるような、新しい畜産体系、動物性タンパク質の供給の仕方が、提案されると良いのではないかと考える。
- 現状の農業における課題として収益が上がりにくい構造になっていることがあ

る。既存の事業者が取り組まれていることが様々あると思うが、今回の我々のチャレンジが補完関係となり、経営におけるスピード向上や、付加価値創出の機会になるように、貢献できればと思う。

- 大学は、一般的には自分たちの得意な研究成果や技術をベースに事業を進める考え方が多いが、本学は、大学の研究成果に基づいてできることを行うのではなく、社会のニーズや未来の在り方を踏まえて、必要なものを考えていきたいと考えている。
- 本日いただいたご意見を踏まえ、基本的には対象項目として稲と卵を中心に、FSモデル案の中間報告をまとめていきたい。引き続き、ご指導、ご助言を賜りたい。

議題 3. 次回、研究会開催日程の確認

次回研究会を開催日催することを確認した。

日時 令和7年11月11日（火）10時から11時30分

場所 東京農工大学 本部 3F 第二会議室

以上